



おにぎり

〈青森県〉 磯沼チヨ 72歳

「ばあちゃん、これ食っていいよ」と少年がおばあさんに小さなおにぎり1個を差し出しました。おばあさんは驚いた顔をして「Hが食べたらいよいよ」。少年は「さっき1個食べたからいいよ。ばあちゃん、昼ご飯まだだよね」。その光景を見た私は涙ぐまばかりでした。

50年も前の、私が勤めて2年目の春の話です。外科病棟勤務でした。少年は小学校に入学したばかりで、八戸市からディーゼルカーで2時間、それからバスで1時間ほどの山奥に住んでいるということでした。入院したときはおなかが大きく膨れあがり手術予定でした。

お母さんは病気で亡くなったという。お父さんは横浜に出稼ぎに行っ

ているので、おばあさんと2人暮らし。入院時は父親とおばあさんと3人で来ました。父親は「なかなか来られないのでよろしく」と、何度も頭を下げておりました。片道3時間はかかる道のり。来れば来たで、すぐ帰らなければならぬ貴重な面会です。その子はとても賢くて、さみしい顔などは見せないのです。「看護婦さん、よろしくお願いします。僕がんばりますから」と言うのです。私は彼を自分の子のように思い、休憩時間はそばに行き、本を読んであげたり、折り紙をして遊んだりしておりました。深夜巡回に行くとき布団をかぶって泣き声をこらえているのです。何度か抱っこもしてあげました。次第に体力がなくなり食欲

も落ちてきたので、栄養科に、ごはんを小さなおにぎりにしてもらいました。おばあさんが面会に来る日はおにぎりを食わずに取っておくのです。私が「H君食べなさいよ」と言いますと、「ばあちゃんは白いご飯を食べたことがないんだよ。僕だってそうだよ。入院して初めて白いご飯を食べたんだよ。ばあちゃんが来ても何にもあげられないので、おにぎりを残しているんだよ。ばあちゃんに食べてほしくて」と言うのです。みんなが貧しくとも思いやりに満ちた時代だったのかなと思います。それにしてもH君を思い出しますと、本当に心悲しくなるとともに、あんなにも慈愛にあふれた少年がいたのだと優しい気持ちになります。